

花葬祭は、出会いと別れのお祭りだ。

この一年で死んだ人々を悼む祭り。

そして新たな生命の誕生を願う祭り。

花が散って種となり新たな命が芽吹くようにという意味合いの、この町がまだ農村だったころから続く伝統的な祝祭だ。

とはいえ、若い世代の男女にとって、花葬祭は、ただ「意中の相手に花を送り、ダンスに誘うための日」でしかない。

子供たちは恋の芽生えに浮足立って、大人たちは「その先へ」のきっかけとして花を贈る。

その、先へ。

先と言うのは、つまりその――。

「うう…：考えちゃだめ…：！」

図書室で本を読んでいた私は、かたく目を閉じて天井を仰ぎ、突然流れ込んできた邪念を追い払った。

ため息をついて、私は窓の外を見る。

なぜかって？

窓の外には、子供たちと追いかけて遊んであげているヴィスクの姿があるからだ。

十五歳で孤児院を出たヴィスクは、親類のツテを頼って学生になった。

それから、もう三年もたつ。

ヴィスクは十八歳になって、私は二十一歳になった。

将来は教師になって、学校に行けない子供たちにも勉強を教えてあげたいのだと熱く語るヴィスクは、この三年で私の知っている背伸びしたがりがり少年ではなくなってしまった。

ヴィスクは暇を見つけては孤児院にやってきて、子供たちに字を教えた。私より、ずっと院長先生に向いているように思える。院長候補と言われている。

私が窓の外を見ていることに気が付いて、ヴィスクが軽く手を振った。そのすきを狙った子供たちに膝裏に突進されて、思い切り転んで子供たちにもみくちゃにされている。

気が付けば見上げるような長身になってしまったヴィスクは、新しく孤児院にやってきた子供たちにも大人気だ。

そんなヴィスクを見ると、なんだか、私は少し拗ねた気持ちになる。ヴィスクは私が持っていないものをたくさん持っていて、これからもたくさん得ていくんだろう。

ヴェイスクはもう私が抱きしめてあげなくても大丈夫だし、私が手を引いてあげなくても大丈夫。

それが嬉しいけれど、寂しいのは、親心みたいなものなんだろうか？

「――なーにくらい顔してんだよ」

「いたっ……！」

ぎゅっと頬をつつかれて、私はぼんやり本を見下ろしていた目を再び窓の外に向けた。

子供たちと遊んでいたヴェイスクが、いつの間にか窓の外に来ている。

つつかれた頬をそっと押さえて、

「暗い顔してた？」

と私はしらばっくれた。

「寂しそうな子供の顔してた」

「だってヴェイスクが来ると、子供たちはみんなそっちに行っちゃうから」

私がわざと唇を尖らせると、ヴェイスクはまぶしいほど爽やかに、くすくす笑った。

「そりゃ、俺は時々来るだけだから、思い切り遊んでやれるもん。オーリがここで見ててくれるってわかってるから、子供たちは俺と思いつきり遊べるんだよ」

くしゃりと私の髪を撫でる手は、大きくて、あたたかい。

私を子ども扱いする、大人の男の人の手だ。

身長が逆転したころから、ヴェイスクはやたらと私の頭を撫でたがる。

昔、私が嫌がるヴェイスクの頭を撫でたことへの仕返しらしいけど、私は別に撫でられるのが嫌じゃないので、全然仕返しにはなっていない。

大人しくヴェイスクに撫でられるままになっていると、ふと、ヴェイスクは私の髪を撫でる手を止め、そっと私の前髪を耳にかけた。

「……なあ。夜、少し時間空けられる？」

「え？」

「外で、何か食べない？ 学校でいい店教えてもらったんだ。オーリが好きそうな店さ」

「えーと……」

私は視線をさまよわせた。

一ヶ月後には花葬祭。

実のところ、戦いはすでに始まっている。

当日にいきなり花を贈っても断られるかもしれないから、意中の相手にはそれとなく、事前に誘いをかけたりするものなのだ。

この三年、ヴェイスクは一度も私に花を贈っていない。

まだその時じゃないから。

まだ自分は大人じゃないから。

まだふさわしくないから。

そう言っ、誰にも花を贈らずにいる。

そして、誰からも花を受け取らないでくれと私に頼む。

バカなヴィスク。私に花を贈るのは、孤児院の子供たちくらいだっ、知っ、てるのに。

今夜もまた、ヴィスクは私に頼むのだろうか。

真剣な目をして、私の手を握っ、自分が大人になるのを待っ、ていてくれ、と。

それとも。

それとも――。

「オーリ？」

「あ、ごめん……ええと、今夜は……ちよつとダメかも」

「そっか……予定あつた？」

「うん。丁度先約があつて……」

ヴィスクは少し考、えて、窓からひらりと図書室に入っ、てきた。

「こ、窓から出入りしちやダメだつて……！」

「しい……先生には内緒。な？」

悪戯つ、ぼく笑っ、て、ヴィスクは私の唇に指を押し当てる。

私がつ、め息を吐くと、ヴィスクは私の隣の席に腰を下ろした。

「ヴィスク？」

「その先約……グロウだろ？」

ぎくりとして、私は黙つた。

凶星だつたからだ。

グロウは貴族の息子で、傍若無人の乱暴者。ヴィスクより一つ年上の十九歳で、最近まではぼつちやりしたのに、ここ一年で急に引き締まつた青年になつてしまつた。

十八歳になると剣技や馬術の稽古が本格的になるらしいから、その関係かな？

性格も少し落ち着いて、孤児院の子供たちをいじめたり、人を小ばかにするようになつてもなくなつてきた。

何かと衝突して来た私とグロウだけ、こつなつてくると、特に争うこともない。

私が会話の中でぼろつと「読んでみたいな」とこぼした希少な本を、なんともなくほいと貸してくれたりするので、最近は少し仲がいくつらいだ。

今夜も「お前が欲しいと言っていたものが手に入った」と言うので、晩御飯と一緒に食べることになった。

どこでかは知らない。

グロウは、他人に自分の行動を決められるのを死ぬほど嫌うので、私には「グロウが決めたことに従う」ことしかできないのだ。

特に何か借りたり、もらったりする時はそうなる。

私は「物を借りるんだから食事くらいはおごりたいな」と思うのだけど、私がそれを言うとグロウは「私に駄犬のごみを食わせる気か？」とか言い出して大ゲンカになるので、黙ってグロウの思う「まともな食事」をおごられておくのが一番いいのだ。

貴族社会の男性が、平民の女に食事をおごられたりしたら、末代までの恥みたいなところもあり。だったら「ほらよ」と物だけ貸して去ればいいのに。なんなら別に貸してくれなくても私は文句言ったりしないのに。

今までイタズラ放題で迷惑かけてた罪滅ぼしみたいなどころがあるのかもしれない。

グロウもヴィスクと同じように、いつまでも子供じゃないってことかな。でも、ヴィスクはグロウのことが好きじゃない。

無理もないと思う。

ほんの三年前までは、本当に手の付けられない悪ガキだったのは事実だし。だから私は、あえてヴィスクに「グロウと会うよ」とは言わなかったし、言いたくなかった。

それなのに。

「どうして知ってるの？」

「言われたから」

「え？」

「グロウに。今夜オーリを花葬祭に誘うから、お前は二度とオーリに近づくな」

私はぼかんとしてヴィスクを見返した。

つまり、その、子供ではなくなつて、大人になりつつあるグロウが、私に花を贈るといふ事は――。

「……グロウって私のこと好きだったの？」

ヴィスクはくしやりと笑つて、

「だーから。昔からそう言ってただろ？ あいつが孤児院にイタズラするのは、オーリに叱ってもらいたいからだって」

と、間抜けな私の額をこつんとつついた。

私は額をさすりながら、顔を顰める。

「なんて迷惑な……というか、贈られても困るよ。身分がそもそも違うんだし」

「俺もそう言ったよ。でも関係ないってさ」

「どういうこと？」

「さあ、愛人にでもする気なんじゃねーの？」

「何それめちやくちや嫌ですけど」

「それか、駆け落ちとか？」

「まさか」

私は笑うけど、ヴィスクは笑わず、肩をすくめた。

「あいつがどういうつもりかなんて、どうでもいいよ。ただ、今夜俺はオーリを花葬祭に誘う気なのに、オーリはグロウに誘われに行っちゃうのかな？
ってこと」

「それは……まあ……約束しちゃったし……」

「じゃあ、こう言ってくれるか？」

「ん？」

「花葬祭にはヴィスクと行くって」

ヴィスクは私の頬をそつと撫でた。

私を見つめる真剣な瞳が不安に揺れて、緊張で高鳴る鼓動が聞こえてきそう。

「俺が贈る花しか受け取らないって、言ってくれるか？」

「うーん……どうかな」

「オーリ……！」

「子供たちが贈ってくれる花は受け取っちゃうかも」

私がほほ笑むと、どつとヴィスクの体から力が抜けた。

私の頬に触れていた手のひらが、私の頭の後ろに回って、私は自然と目を閉じる。

閉じた視界の向こうから体温が近づいて、触れただけで離れていったその柔らかさとぬくもりに、私はなんだかひどくそわそわして、座っていられなくて立ち上がった。

でも、それはヴィスクも同じみたいで――。

「や――ったあああ！」

ほとんど叫ぶように言って、窓から飛び出して行ってしまった。

ああ……また窓からの出入りを許してしまった。

急に駆け出してきたヴィスクに子供たちがびっくりしてる。

「まったく……」

思わず、私は嘔き出した。

「子供みたい」



正直言って、半信半疑だった。

グロウが私を誘うつもりだと言われても、とても信じられなかった。

「ただ馬車で私を迎えに現れたグロウの姿を見て、私は「ああ、誤魔化しちゃだめなんだ」と理解した。」

女性を誘う、男性の装いだった。

グロウと会うときの私は、できるだけ貴族社会で非礼にならないように、きちんとした淑女然とした服を選んでいる。

詰襟で、色が控えめで、肌の色も出ないような、無地のワンピースだ。

孤児院育ちの私はドレスなんて持っていないし、グロウも私におしゃれさなんて期待していない。

そういう関係を、グロウは今日、壊そうとしている。

急に全身に緊張が走って、私はお腹の前で組み合わせた指に力を込めた。

「馬車乗る前に言っておくんだけれど」

私のかたくこわばった表情に、グロウも何かを察したように表情を硬くする。

「私——」

「言うな。聞きたくない」

「グロウ、でも」

「聞かないと言っている！」

苛立つて、グロウは私の腕をつかんだ。

「いいから馬車に乗れ」

「でも……」

「早く！」

「——嫌がってるぞ」

威圧するような声が上がって、私とグロウは同時にそちらに顔を向けた。

建物の陰から、なんてことない風を装って、ヴェイスクが出てくる。

「ヴェイスク……なんで……」

「失せる。これは私たちの問題だ」

ぐいと腕を引かれて、私はグロウの背中に隠されてしまう。

そのまま馬車に押し込まれかねない勢いだけど、どうしよう、このまま乗っちゃって大丈夫かな？

なんだかこの流れだと、レストランじゃなくて別の場所に連れて行かれそうな空気があるけど……。

「諦めるグロウ。オーリはお前の馬車には乗らない」

「約束をしたら、それを果たす。それが最低限の礼儀だろう」

「嫌がる婦人を無理に馬車に乗せない、という礼儀は貴族社会にはないのか？」

にらみ合う二人の間で空気が張りつめて、ものすごく居心地が悪い。

私は軽くグロウの背中をつついた。

「なんだ」

「私、ヴェイスクの花を受け取るよ、グロウ」

「私には関係ない」

「グロウの花は受け取れないけど、それでいいなら、食事に連れて行ってくれる？」

「オーリ！」

ヴェイスクがとがめるように私を呼ぶけど、グロウの言う通り、約束は約束だ。

だけどグロウは背中から刺されたみたいで顔を見下ろして、いつも不機嫌そうな眉間のしわをさらに深くする。

「優しくしてやった……」

「うん」

「お前が喜ぶようにと、私は……！」

「嬉しかったよ、してくれたこと全部」

「……お前のために……ドレスだって、用意したんだ……」

「え！？ 今日のために……！！？」

「お前はいつも……私と釣り合わない、気にするから……」

グロウは拳を握りしめる。

ああ、本当に……。

この日のために、グロウは、たくさん準備してくれたんだ。

着ていく服を選んで、私のための服を選んで、食事の席を用意して、恋敵に「自分が誘う」と伝えるに行った。

私は知らない。

聞いたことがない。

十九歳で、たくましく、顔立ちのいい、貴族の子息のグロウが、女遊びをしているという話を、ただの一度も聞いたことがない。

傍若無人で傲慢なグロウは、恋愛に対して、驚くほど一途だったんだと、私は知らなかった。

その人の恋を、私はいま、否定する。

「ごめんねグロウ」

「……謝罪などいらぬ」

苦々しく言って、グロウは一步、私から離れた。

「うぬぼれるな。からかってやろうと思っただけだ。お前に私の花を受け取らせたうえで、みじめに捨ててやろうとな」

泣きそうな笑顔で吐き捨てられた、ヒビだらけの虚勢が、私をヴィスクの方に軽く押した気がして、私はグロウから離れた。

とつさに私の腕をつかもうとして拳がった腕は、こらえるように途中で止まって、私には届かない。

ヴィスクに駆け寄って、私は、一人で馬車に戻るグロウに振り向いた。

その足がふと止まる。

「仕立てたドレスを、届けてもいいか」

「え？ それは……」

「お前が着てくれないければ、職人の仕事が無駄になる。きっとよく似合うんだ。本当に、良く似合うはずだから」

子供みたいに笑って、反論を許さずに馬車の戸を閉めたグロウを、私とヴィスクはしばし見送る。

背後から、ヴィスクがそっと私を抱きしめた。

「ごめん……予定、ダメにさせた」

「ううん。来てくれてよかった」

「……そうかな」

ヴィスクは長身を折り曲げて、私の肩に額を押し付ける。

「俺が不安になって……誘いを断ってくれなんて言わなければ、二人は普通に食事に行って……オーリは誘われて……驚いて、困って、断って……それで終わったんじゃないかな。こんな風に、あいつを追い払うようなやりかたじゃなくて……」

「どうしたの？ グロウのこと思いやるなんて、めずらしい」

「だってあいつ……」

深いため息が、私の肩をくすぐった。

「ちゃんと、本気だった」

「……そうだね」

その手を取ってあげられないことが苦しいくらい、本気だった。

「ごめん。俺を選ばせて……ごめん……」

「ヴィスクが選ばせたんじゃないよ」

私はヴィスクに振り返る。

「私が選んだの」

ヴィスクの顔を両手で包んで、私は思い切り背伸びをする。

唇が重なって、舌が触れた。

ざくりとする感触。

不安な味。

くすぐったくて、落ち着かない。

長く続けられなくて、私とヴィスクは大人のキスを早々に切り上げる。

私のお腹がぐうと鳴いて、ヴィスクもはっと思いついたようにお腹を押さえた。

「やばい。すげえ腹減ってる」

「うん、私も」

「何か…：：：食べに行く？」

「うん」

私たちは夜の街に駆け出す。

不安げな大人のキスより、楽しい夜の食事の方が、今の私たちには必要だった。



あれから一ヶ月がたった。

何気なく毎日を過ごしていた私たちは、だけど確実に少しだけ変わって、止まっていた時間が動きだしたように感じる。

私はただ、立ち止まって待っていただけ。

だけど隣にヴィスクが並んで、私の手をひっぱった。

そんな風を感じた。

「——俺はまだ、大人じゃない」

窓の外から、花葬祭の音楽が聞こえてくる。

私たちはヴィスクの部屋で、二人きりで、お互いの顔も見られずにベッドに並んで座っている。

私の手には贈られた花があって、私は手持ち無沙汰に、そのしっとりとした花弁を撫でている。

「まだ仕事もしてないし、グロウみたいにドレスだって贈れない。でも…：：！」

ヴィスクの手が、私の手をつかんだ。

顔を上げると、ヴィスクはいつの間にか私を見てる。

黒い瞳。

窓の外の光が映りこんで、キラキラしてて、すごくきれい。

「俺は学校で仕事して、オーリは孤児院で仕事して……忙しくて、あんまり二人の時間が取れなくて、会えなくて不安になったりするかもしれない」

「うん、ありそう」

「でも、絶対に、大切な時は傍にいるから。いつでも必ず、俺はオーリを選ぶから。俺を選んでよかったって、きつとそう思わせるから」

「うん」

「俺と……結婚してくれる？」

「うん。待ってる。ヴィスクが仕事を始めて、私にドレスを贈ってくれたら、私はそれを着て、花の輪の冠をかぶって、みんなに結婚しましたって言うって回る」

ヴィスクの瞳に輝いていた、窓の外の輝きが、ふと、あふれてヴィスクの頬を伝った。

あ、とヴィスクは声を上げて、慌てて自分の目元をぬぐう。

それがひどくもったいなく思えて、私はヴィスクの手をつかんで、あふれる涙を唇でぬぐった。

「オーリ……？」

「待ってる。けど、もう待てない」

胸がどきどきして、苦しい。

私はこれ以上の緊張に耐えられない。

いつかな、今日かな、明日かなって、そわそわするのは、終わりにしたい。

ヴィスクは何も言わなかった。

不器用に私のブラウスのリボンをほどいて、ボタンをはずして、私の体をそつとベッドに押し沈める。

私たちはお互いに、何が正解かを知らない。

だけどお互いの素肌に触れたくて、私たちは花卉みたいにしっとり濡れたお互いの肌を、夢中になってまさぐりあった。

本で聞きかじった、あるいは道端の噂話で聞いた、居心地の悪くなるような知識によって、私たちは少しずつ大胆になって、最初から何をすべきか知っていたみたいに、快楽を与え合う。

汗と、唾液、私の中からあふれる欲望の蜜の香りが混ざり合って、頭の芯がぼうつとして、まともなものが考えられなくなる。

「力抜いて……痛かったら、すぐやめるから」

「ん……」

私の体の奥深くに押し入ってくる感覚は、鈍いような、痛いような、苦し
いような、とても心地よいとは言えないもので、なのにひどく離れがたく
て、私は両足をヴィスクの腰に絡めた。

「ちよつと待った……！ これ……こんな……ッ……！！」
ヴィスクは唇をかみしめると、押し入った切り、じっと動かずに堪えてい
る。

私に気を使ってるのかと思つて軽く腰をゆすってみると、
「う、動くなつて……！！ 今はちよつと……！！」

と、ひどく慌てた抑止が入った。

「痛いのか？」

不安になつて私が聞くと、ヴィスクは泣き笑いみたいな情けない顔をし
て、私を抱きしめて、「逆だよバカ」と文句を言った。

なんだかかわいい。

言つたら拗ねるから言わないけど。

ヴィスクは私の耳や首筋に何度もキスしながら、ゆっくりと私の中を行き
来した。

引き抜かれて、押し込まれて、ゾクゾクとして、落ち着かない。

その動きは少しずつ激しさを増して、ベッドの軋む音が水音に響いて、私
は水の中でもがくように、行き場の定まらない手でシートをつかむ。

「ごめん、俺……もう……！！」

うめくように言つて体を伏せたヴィスクは、私の腰を引き寄せて、一番奥
を貫いた。

びくりとヴィスクの腰が震えて、女の子みたいに甘い声が、ヴィスクの口
から切なげにこぼれる。

その声を聴いた瞬間、急に私も、なんだかひどく苦しくなつて、縋りつく
ようにヴィスクの肩に爪を立てた。

「いっ……っ……」

「あ、ごめ……ごめん、なんか……急に、体、いうときかなくて……」
自分で自分の体に触れたことなら、ある。

ただどよくわからなかった。

なんとなく、快樂のかけらのようなものが見えるけど、本に書いてあるよ
うな、目のくらむような光の明滅はなくて、ただぼんやりと「こんなものか
のかな」と思っていた。

だけど今、私はたぶん、ヴィスクに抱かれて「いった」んだ。

それがひどく恥ずかしくて、私はヴィスクの肩をぐいと押し返した。

「オーリ？」

「あの……私、あの……お風呂入りたい、から……」

「んー……まだダメ」

「え！？」

「もう一回。な？　なんか、俺だけいっちゃったし……」

「わ……私も……いった、よ……？」

たぶん。

だけどヴィスクは拗ねたように唇を尖らせる。

「演技してるだろ」

「し、してないよ！　もー！　ヴィスクめんどくさい！」

私は枕をつかんで、バシバシとヴィスクを叩く。

「これからいつでも、またすればいいんだから、今日はおわり！　お風呂！」

「わかった、わかったよ……！　用意するから」

「あっ……」

ずるりと引き抜かれる感触に、私は思わず声を上げた。

ヴィスクはそんな私の声にきよとんとして、

「あ」

と困ったように顔を顰める。

「ごめんオーリ。今ので本格的に勃ちっちゃった」

「嘘でしょ！？」

「もう一回だけ。それで我慢するから。ね、お願い」

急に、弟みたいな声を出す。

甘えられると私が断れないって知ってるくせに、ずるい男だ。

結局私はヴィスクのお願いを受け入れて、その日は朝までお風呂に入れなかった。

私たちは回を重ねるごとにお互いの体の楽しみ方を知って行って、私も、ヴィスクも、すっかり溺れて抜け出せなかった。

ひどく、ただれた夜を過ごした。

白んだ空がまぶしくて、差し込む朝日が恨めしくて、私たちは世界で一番幸せで――。

「……なんかさ、夢見たんだ、俺」

だからだらとお風呂に入って、身支度を整えながら、ヴィスクはふと思い出したように切り出した。

「夢って？」

「オーリが泣いてる夢」

「どうして泣いてたの？」

「わかんねえけど…：…なんか俺が泣かしてた気がする」

「え、ひどい」

「な、ひどいよな。夢でもすげえ嫌な気持ちで…：少し、怖かった。俺、ほんとにオーリとこうなっただけいいのかなって」

「ただの夢で？」

「生々しい夢だったんだよ。なんでか俺だけおっさんだったけど」

「変な夢だね」

私が笑うと、ヴェスクも「ほんとにな」と言ってクスクス笑う。

「誓うよ、オーリ。俺は絶対、オーリのこと泣かせない。泣かせたら絶対に謝る。許してもらおうまでもなんでもするって」

「信じるよ、ヴェスク」

私がほほ笑むと、ヴェスクは私を抱き寄せる。

夢の残滓を追い払うように、私たちはキスをした。

END